



アメリカ医療のトリセツ

取扱説明書



渡米してすぐの方も、長年こちらに住んでいる方も、米国医療に関することになると「よくわからない」「もっと知りたい」と感じている方も多いのではないのでしょうか。そこで、ミシガン大学の家庭医学科の先生方に医療に関する様々なトピックについてまとめていただき、連載でご紹介します。

Vol. 08

アメリカの健康保険(3) 保険のプランで何がカバーされるのか?

6月号と7月号で、アメリカの健康保険をどのように選ぶかということをお話ししましたが、これは、次の年のプランを選んだり、転職したりする際には役立ちますが、読者の多くは、いま既に健康保険のプランに入っていて、そのプランで何がカバーされて、何が自己負担分として請求が来るのかに、最も興味をあると思います。ご自分の健康保険が何をどこまでカバーするかを調べるには、保険のプランの詳細を記した本を参照するか、健康保険のウェブサイトについて、ログインすることによって詳しいカバーの内容を参照することができます。その中でよく出てくる語彙について、**実例とともに紹介していきます。**

1. ネットワーク Network:

保険のプランのほとんどは、医療を受ける場所が**ネットワーク内**か**ネットワーク外**によって自己負担分が変わり、ネットワーク内で医療を受けるほうが、自己負担分が少ない仕組みになっています。ネットワークは、保険によってはウェブサイトから調べることができますが、直接電話をして質問しないと、どの病院や医師がネットワーク内なのかかわからないこともあります。

例1) 日本語を話す医師にかかりたいが、その医師はネットワーク外なので、受診費用がすべて自費になる。でも、診察は日本語で受けたいので、自費で受診しているが、採血やレントゲン検査は、医師からのオーダーをネットワーク内の医療機関に送ってもらって行っているので、保険が効いて、診察以外の出費はない。

例2) 神経科医にかかりたいが、6か月待ちなので、ネットワーク外の専門医を紹介してもらった。紹介状をもらったら、ネットワーク内の専門医と同様にカバーされた。

2. コペイ Copay:

受診の時に支払う予め決まっている自己負担分をいいます。どのような保険プランか、ネットワーク内か外か、かかりつけ医か専門医か、どのような手術か、等の状況によって額がそれぞれ違い、健康保険のカバーの詳細の欄に記載されています。

例) かかりつけ医による定期健康診断: 無料
かかりつけ医での一般受診: \$25
ネットワーク内の専門医受診: \$30
ネットワーク外の専門医受診: 紹介状がない場合は全額負担。紹介状がある場合は\$35
アージェントケア: \$35
救急外来受診: \$100
など

3. 予防医療・健康診断、検診

Preventive Service:

Deductibleが高い保険も、**予防的な検診**は100%支払われるプランが多いです。毎年の検診や、健康診断で勧められる検査は概ね支払われることが多いです。では、どのような内容が**Preventive service**に含まれるのでしょうか。保険でカバーされる予防医療は、年一度のかかりつけ医との診察、年齢や既往によって米国医療のガイドラインによって推奨される癌検診(子宮頸がん検診、マンモグラム、大腸がん検診など)や血糖とコレステロールの採血検査、予防接種などです。保険によっては、特に理由がはっきりしていなくても、検診の一部としてもっと多くの種類の血液検査をしてもカバーする保険プランもありますが、確認せずに推奨されていない検査を追加すると、自費負担となることもあります。また、胃がん検診のバリウム検査は、日本では行われていますが、アメリカでは胃がんの検診は、胃がんの予防にならないことが立証されているため、勧められておらず、保険が効かないことが多いです。また、予防接種の支払いも、保険のプランやワクチンの種類によっても支払いが違っているので、医師に勧められても、自費負担がないということではありません。また、検診の際に、予防医療以外の医療相談をした場合や、検診で見つかった異常について検査をしたり、治療をする場合、その相談や治療は、予防医療や検診にはあたらないため、一般受診と検診を両方受けたという扱いになります。

例1) 検診でかかりつけ医と相談して、大腸がんのスクリーニングとして大腸カメラを受けることにしたので、胃カメラも同時にしてもらおうと思ったが、保険会社に確認したら、胃カメラを足すと\$2500の自己負担になることが分かったので、大腸カメラだけを受けることにした。

例2) 検診の際に、最近落ち込み気味であることをかかりつけ医に話したら、かなりひどい鬱だといわれて、カウンセリングと投薬を勧められて、治療を開始した。検診だからコペイはないと思ったのに、受診料を請求された。

☞これは、検診と一般受診を一度に受けたことになります。

筆者プロフィール:

医師 リトル(平野) 早秀子(ひらのさほこ)
ミシガン大学医学部
家庭医学科助教授

1988年慶応義塾医学部卒業
1996年形成外科研修終了。
2008年Oakwood Annapolis
Family Medicine Residency
終了後、2008年より、ミシガン
大学家庭医学科で日本人の患者
さんを診察しています。産科を
含む女性の医療、小児医療、皮膚手術、創傷のケアに、特に
ちからを入れています。



4. 受診時に勧められる検査:

検診でも、病気で受診しても、医師が検査を勧めることはよくあります。検査には、血液検査、尿検査、レントゲンなどの画像検査、および、大腸カメラなどの手技が含まれます。これらの検査を、勧められた場所で受けた場合、どれくらいの自己負担になるのかはある程度、予め把握しておくことが必要です。今まで、病気でかかって採血やレントゲンで請求が来たことがない、という人は、おそらく保険が効いているので、高額な医療については、保険が効くかどうかは調べておくことをお勧めします。婦人科的な処置、大腸カメラ、皮膚病変の生検などの手技や、レントゲン検査の中でも、CT、MRI、超音波検査などは、かなり高額なので、検査の予約を取った後でも、保険のカバーを確認することをお勧めします。たとえ、カバーされなくても、せざるを得ない検査というのがありますが、請求が\$2000とわかっていれば、他の方法を医師と相談することもできるかもしれません。

例1) 子宮内膜症のため、子宮内器具の挿入を勧められたが、保険会社に確認したら、自費負担が\$2500といわれたので、医師と相談して、ピルの処方箋をだしてもらったことにした。ピルも保険は効かないが、月々\$4でもらえることがわかった。

例2) 血尿で受診したところ、CTを勧められたが、保険に確認したところ、deductibleが\$4000なので、CTは\$1500 全額を払わないといけなかったといわれたので、医師と相談して、様子を見ることにした。

例3) 大腸カメラは大腸がん検診としてカバーされるということだったが、ポリープが見つかったその場で切除してもらったら、手術料\$3000の請求書がきた。驚いて保険会社に連絡して、自分のdeductibleが\$5000だと初めて知った。

最後に

このように、アメリカの健康保険は日本と違って、会社の数もプランの種類も多種多様で、何がカバーされて、何が自費負担分になるのか、とてもわかりにくく、医療従事者側が患者さんそれぞれのプランのカバーを把握することは不可能です。まずはご自身が入っている健康保険プランの詳しい情報に目を通し、高額と思われる検査や手術を受けるときには、保険会社に連絡して、支払われることを確認することをお勧めします。保険会社に連絡すると、ご本人であることを

確認する質問がいくつかあるので、本人またはご家族が電話することが理想的です。健康保険会社は、通訳を提供する義務があるので、電話した際、まず日本語通訳、Japanese interpreter をリクエストして、通訳を通して質問をして、答えてもらうことができます。いちいち自分で保険会社に連絡するのは面倒ですが、予想外に高額な請求書が来る危険を回避する、または予測するために是非お勧めします。